

はじめに 本書に関する若干の覚書

マガジン9編集部

ウェブ上の週刊誌「マガジン9条」（2005年3月創刊、2010年5月から「マガジン9」と改称）で、鈴木邦男さんの連載「鈴木邦男の愛国問答」は2008年6月4日の「第1回」日本一の愛国者、ここに来たる」で始まった。

きっかけは「保坂展人のぶとさんを励ます会」の集会での出会いだったと思う。「マガ9」代表が同じ鈴木姓であることから名刺交換し、いろいろと話をするようになった。

むろん、右翼活動家としての邦男さんの名前は世間に轟とどろいていたから、最初はおっかなびっくりの付き合いだった。しかし、リベラル派の代表のような保坂氏の集会に参加していたのだから、一般的なイメージの暴力的な右翼とは雰囲気がるで違うことは分かっていた。何度か話をするうちに、その柔軟な思考に惹ひきつけられていった。

そこで「マガジン9条」への連載を依頼した。

「マガ9」は当初の名称「マガジン9条」からも察せられるように、「憲法第9条の精神を大

切に守るためのプラットホーム」として立ち上がった。したがって、改憲派右翼を自認する邦男さんの連載については、編集部内でそれなりの議論があった。けれど「議論なき改憲や一方的な多数論での改憲強行には強く反対する」という邦男さんの姿勢には頷くことが多かった。考え方は違っても、聞くべき意見をお持ちだと判断した。

連載とはいっても、制約はまったくない。好きな時に好きな分量で、時には気に入った相手との対談も可能という、まさに自由気ままな連載の開始だった。そこがウェブマガジンの融通無碍なところだ。

邦男さんにもそれなりの思いはあったらしい。連載開始時の文章には、いささか緊張の色が見える。ほとんどものに動じない、それでいて飄々とした文体が持ち味の邦男さんにしては、珍しく硬い。「意外な展開だ。想定外だ。僕が『マガジン9条』に連載するなんて」と、やや肩に力が入っている。本人は「アウェイでの闘いですから」などと言っていた。だが、それもほんの最初の数回だけ。次第に「邦男節」が全開となる。

編集担当は塚田壽子だった。彼女はその思い出を次のように語っている。

「ファックスで邦男さんから送られてくるのは、癖のある直筆文字。読み解くのに四苦八苦し

ました。こちらでパソコンで打ち換え、そのプリントアウトをファックスで送り返しチェックをお願いする。なにしろ、当時でももう珍しい手書きの原稿でしたから。

邦男さんはとてもお忙しい方で、全国あちこちに出かけていました。その宿泊先へファックスを送信しチェックしてもらったことも多かったです。でも、どこへ出かけていても、どんなに夜遅くなっても、必ずこの作業をしてくださいました。今週は書くよ、と予定されていて原稿を落としたことは一度もありませんでした。

邦男さんの『マガ9』への期待はとても大きかったと思います。憲法9条を守るという私たちの活動を、とても重要だと思っていました。それだけに、厳しい叱咤しつた激励もありましたけど。この本は、そんな邦男さんの、本当に『遺言』です。それを宝物にして、大事にしていかなければと思っています……」

なお、本書には前史がある。

2011年11月に、同じ集英社新書から、鈴木邦男著『愛国と憂国と売国』が出版されている。実はこれも、同じ「マガ9」連載を再編集して新書化したものである。しかし連載が80回ほどの際にまとめたもので、それも本来の連載時の文章を解体してテーマごとに換骨奪胎した部分もあり、連載そのものとはやや内容を異にする。むろん、邦男さん自身の手によるものだ

が、編集者の手も加わっている。

今回は、文章には一切手を加えていない。残念なことに、もう邦男さんはおられない。編集サイドとして手を加えるわけにはいかない。

ただ、連載当初から、テーマや分量はその都度、邦男さんが判断し編集部と相談する、という約束で始まったのだから、掲載順に収録すると、読み手としては内容がバラバラという感じを受けてしまうだろう。それに220回を超える長期連載、原稿は膨大な量である。

そこで「マガ9」編集部としては、新書編集部と相談の上、テーマを設定し、それに従って収録するという編集作業を行った。むろん、文章自体は掲載時そのまま、誤字脱字の訂正とルビ以外の改変は行っていない。また、連載タイトルの「愛国問答」が示すように、多くの方々との「対談」も含まれているけれど、本書はあくまで邦男さんの「遺言」として、ご本人の文章のみを収録することとした。前著との多少の重複はあるが、邦男さんの連載全体を俯瞰してみるためには必要と考えた。

連載は約10年間続いた。多忙やその他、さまざまな理由があって定期的に掲載というわけにはいかなかったが、今、読み返してみてもまことに見事、思考は首尾一貫していたことがよく分かる。最終的には体調のこともあり、225回の連載で中断ということになった。

もっと書き続けてほしかった。

「日本国憲法」に関して、いささか不穏な空気が漂い出している現在においてこそ、鈴木邦男の憲法論、政治論、社会論はますます必要になっていると言わざるを得ない。

出でよ、次代の鈴木邦男。

目次

はじめに 本書に関する若干の覚書

マガジン9編集部

第一章 愛国心

- 1 日本一の愛国者、ここに來たる（第1回 2008年6月4日）
- 2 「反日」だらけのニッポン（第2回 2008年6月18日）
- 3 「アナキズム」宣言（第34回 2009年9月23日）
- 4 五輪は、都市対抗スポーツの祭典へ（第35回 2009年10月7日）
- 5 僕を育ててくれた街、仙台（第71回 2011年3月23日）
- 6 「愛国心」は理性を狂わせる（第106回 2012年8月22日）
- 7 「偉い人」はつくられたのか？（第149回 2014年4月23日）

- 8 8月15日、靖国神社の光景（第157回 2014年8月20日）
- 9 「闘う」のはそんなにカッコいいのか（第204回 2016年8月17日）
- 10 「日本第一」にだまされるな（第215回 2017年1月25日）

第二章 憲法

- 1 「明治憲法復元改正論」を唱えていた40年前（第3回 2008年7月2日）
- 2 護るか？ 変えるか？ 憲法1条から8条まで（第4回 2008年7月16日）
- 3 憲法9条は、戦争放棄と戦争箒をうたっている（第18回 2009年2月4日）
- 4 岬の思想（第20回 2009年3月4日）
- 5 3・11以後の改憲論議（第74回 2011年5月11日）
- 6 国民投票で、冷静に「改憲」を判断できるのか？（第202回 2016年7月13日）
- 7 改憲運動をやってきて、いま思っていること（第217回 2017年2月22日）
- 8 憲法を変えれば、〈現実〉も変わるのか？（第220回 2017年4月5日）

第三章 表現の自由

- 1 街宣の原点にかえれ（第7回 2008年9月3日）
- 2 なぜだ!? 映画『靖国』が中国で上映禁止（第22回 2009年4月1日）
- 3 美術館に展示された〈天皇〉（第50回 2010年5月12日）
- 4 「暴力団排除条例」を考える（第84回 2011年10月12日）

第四章 差別と格差

- 1 「中国といかに向き合うか」を考えた（第136回 2013年10月16日）
- 2 僕を守ってくれた人たち（第140回 2013年12月11日）
- 3 大杉栄が生きた時代と今（第170回 2015年2月25日）
- 4 「ラスコーリニコフの社会」について考えた（第171回 2015年3月11日）
- 5 ソウル大学で、ヘイトスピーチについて話してきた（第172回 2015年3月25日）

第五章 宗教と政治

- 1 反戦僧侶・竹中彰元のこと（第54回 2010年7月7日）
- 2 「オウム」を消してしまっただけでいいのか（第87回 2011年11月30日）
- 3 芹沢光治良記念館で考えたこと（第147回 2014年3月26日）
- 4 「宗教」と「愛国心」は似ている（第199回 2016年5月25日）

第六章 憂国

- 1 強いリーダーを欲する「蟻の集団」（第8回 2008年9月17日）
- 2 「国民議員制度」を提案する（第33回 2009年9月9日）
- 3 政治家と政治評論家（第45回 2010年3月3日）
- 4 ないものねだりはやめよう（第46回 2010年3月17日）
- 5 連合赤軍化する日本（第92回 2012年2月8日）
- 6 日本人は「優しさ」を取り戻せるのか（第115回 2012年12月26日）
- 7 僕らはずっと負け続けている（第126回 2013年5月29日）

8 「安全」「安心」「平和」を求める国民の不安がつくり出した法律

(第141回 2013年12月25日)

9 「潜水病」にかかってしまった日本(第158回 2014年9月3日)

10 「三島の不在」は、あまりに大きい(第168回 2015年1月28日)

11 どうして老人が「過激派」になるのか(第179回 2015年7月8日)

12 靖国参拝と70年談話について考えた(第182回 2015年8月19日)

第七章 右翼と左翼

1 「怪物弁護士」遠藤先生に学んだこと(第16回 2009年1月7日)

2 井上ひさしとクニオ(第42回 2010年1月20日)

3 長くて暑い8月15日(第132回 2013年8月21日)

4 孤立無援で闘ってきた人たち(第150回 2014年5月14日)

5 僕を変えた32年前のある出会い(第154回 2014年7月9日)

6 デマと闘う選挙運動の異常さ(第165回 2014年12月10日)

7 一水会「脱右翼宣言」と、これからのこと(第181回 2015年8月5日)

解説 覚悟の男・鈴木邦男 白井聡

- ・肩書きは当時のものです。
- ・敬称は省略している場合があります。

第一章 愛国心

1 日本一の愛国者、ここに来たる

(第1回 2008年6月4日)

意外な展開だ。想定外だ。僕が「マガジン9条」に連載するなんて。「僕でいいの？」と何度も聞き返した。読者だって戸惑っているだろう。「何でこんな奴やつに連載させるんだ」と。だから反対の声が強かったらすぐにクビにしてほしい。民主主義には従う。

そうだ、一度、インタビュールしてくれたことはあった。でも、あれは「マガジン9条」の余裕。寛容だと思っていた。「改憲派にもたまには発言させてやるか」という「強者の余裕」だろう。そしてそれが岩波ブックレットの『使える9条』に載った。「12人が語る憲法の活いかしかた」と書かれているが、異分子は僕だけだ。皆「活いかしかた」を真剣に、キチンと論じている。異分子の僕だけが、憲法の「壊こわしかた」を喋しゃべっている。全体の統一と調和を一人で乱して

いる。申し訳ない。でも、これも「勝者の余裕」だ。「壊しかた」も含めて論じ、それが大きな意味で「活かしかた」になっている。改憲派の右翼をも「活かし」て使おうという大きな度量を感じた。これこそが「日本精神」かもしれない。感服した。

最近思うのだが、憲法論議にも「ねじれ現象」が起きている。政界と同じだ。40年間も改憲運動をしてきた僕なのに、改憲派からは全く相手にされない。改憲派の集会には一度も呼ばれない。むしろ「獅子身中の虫」だと思われる。「同じ」はずなのに少しでも違いがあると許せないと思うらしい。よく言えば潔癖なのだ。でも余裕がない。

変な話だ。世の中は「右傾化」だと言われ、改憲派の方が多いと言われているのに。なぜなんだろう。「勝者の驕り^{おごり}」なのか。いやいや、本当は「勝者」ではないのかもしれない。誰かがつくったムード、誰かが言い出したムードだけなのか。「守る」よりも「見直し」「改革」「変化」の方が格好よさそうだ。それだけのムードやイメージだけかもしれない。だって、「憲法見直し」には賛成だが、「9条改正」にはちよつと待て、という人が多い。また、前文をはじめとした具体的な改憲案が出てくると、「えつ、変えてこんなものにするの？」と戸惑い、「だったら今の方がまだいいや」と思ってしまふ。前文については僕だってそう思う。それに改憲を主張する人間の品格がある。こんな奴がやるんじゃないや嫌だ、と思ってしまふ。だから「勝利」を目前にして「改憲派の内ゲバ」が始まったのだ。批判、罵倒、個人攻撃……と、まるで

連合赤軍の内ゲバ状況だ。

それに比べて、護憲派の方は大らかでいい。品格もある。まあ、本当はいろんな事情を抱え、内ゲバ的状况もあるのかもしれないが。でも僕は「外部」の人間だし、異分子だから、内部事情にはタッチしてないし、知らなくていいんだ。

もしかしたら、「守る」という姿勢は、優しく広がりがあるのかもしれない。寛容になるのかもしれない。本当は嫌いだが、でも天皇制を含めて、この憲法を守ろうとする。うん、最大の「天皇制擁護」勢力だ。護憲派は「右翼」だ。そこまで言ったら「褒め殺し」か（褒めてないか）。

また、前文から始まって、全て「歴史的仮名づかい（旧仮名）」で書かれている。それを含めて、護憲だという。日本の歴史・伝説を一番守ろうという人々じゃないか。「この憲法の精神を活かし、歴史的仮名づかいにしませう！」という運動だつて起きるだろう。この憲法を軸にして「右翼革命」が起きるかもしれない。右翼の場合は、革命じゃなく「維新」の方が好きだ。じゃ、憲法を軸にした「平成維新」だ。これは十分にありうる話だ。その尖兵が僕かもしれない。僕は敵の陣地に放たれたスパイだ。工作員だ。そんな危ない人間を、護憲派は受け入れ「活かし」ている。いいのかよ、と心配になる。

護憲派にも、いろんなグループがあるらしい。これも不思議だ。「変える」のなら、いろん

な変えかたがある。しかし「守る」んなら、同じだろう。誰が、どのように守るのでも、「守る」ことは同じだ。「守る」内容は同じだ。でも、いろんなグループがある。あるいは反目や対立もあるのかもしれない。奇妙だ。分からない。誰か教えてほしい。この連載では、いろんな人との対談も考えてるというから、その点も教えてほしい。

このグループに呼んだ講師は他のグループには呼ばない。このグループではどこの政党に近い。このグループはどこの労働組合と近い……と、「噂」は聞く。でも、いいじゃないか。守る「内容」は同じなんだから。あるいは、「守りかた」の強弱があるのか。「守りかた」の方法論が違うのか。それでは「愛国心」と同じだ。「愛しかた」の強弱が違う。「愛しかた」の方法論でけんかしている。「愛」なんて口に出すから嘘になる。心の中に秘めておけばいいという人もいる（僕だけだ）。

ところで、護憲グループだ。「守りかた」の温度差はあるのだろうか。でも、僕は、その全ての護憲グループに呼ばれている。「九条の会」「9条連」「憲法行脚の会」「9条ネット」……と。それに去年の4月にはニューヨークの「護憲シンポジウム」にまで呼ばれて行ってきた。憲法24条を書いたベアテ・シロタ・ゴードンさんとも話してきた。これは奇跡なことだろう。だったら、僕がやってやろうか。日本の護憲グループの大同団結を。いや、世界中の護憲グループの大同団結を。うーん、夢が膨らむな。

でも、その前に「裏切り者め!」「国賊!」と、右翼に殺されるかもな。いや、狙われるほど大物じゃないし、何も「裏切り」は今に始まったことではない。右翼だって、呆れ^{あき}はてて、相手にしないだろう。

何を考えているか分からない。何をしでかすか分からない。自分でも自分の心が読めない。自分でも持て余している。そんな僕でもいいのだろうか。「いいですよ」と「マガジン9条」は言う。日本一自由で開かれた場所だ。よし、挑戦してみよう。ここで書くことで、さらに強固な改憲派になるか、護憲派に転向するか。あるいは憲法なんかいらぬという「超憲派」「無憲派」になるのか。自分の成長、変化が楽しみだ。励ましなんかいらぬ。どうせ友達なんかいないんだし。愛も連帯も支援もいらぬ。批判・罵倒だけがいい。あるいは「こういう考え方はどうだ」「これについてはどう思うのだ」という難問をぶつけてほしい。それをどう料理するか、あるいは、つぶれて終わるのか。それも見届けたい。何を書き、どうあがき、どう暴れるか。読者と共に、僕も「新しい鈴木邦男」に期待している。